令和３年度　研修報告

周南市立勝間小学校

１　研修の概要

（１）主題設定の理由

本校は、平成27年度から「主体的に学習に取り組む児童の育成」を柱として研究に取り組んできた。対話的な学びによる協働学習や、学習形態の工夫、表現活動の工夫、振り返りの充実と様々な視点で研究を深めてきた。昨年度は「対話的な学びや深い学び」に視点を絞り、研究を進める中で多くの成果を得ることができた。しかし、相手を意識した話し方や相手の話を聞き、自己の考えを深めることなど対話的な学びへの課題が見られた。また、本校の児童は元気で明るく自己の感情を素直に表現することができる児童が多いが自分の考えをもち、主体的に行動することや、きまりを守り、自他の権利を大切にすること、気持ちのよい挨拶や丁寧な言葉遣いをすることなどに課題が見られる。

生活・行動面においても、学習面においても本校の課題は多い。そこで本年度は、研究主題を『人としてよりよく生きようとする「かつま」っ子の育成』とし、本校児童の課題を根本から改善していくことを目指して、道徳教育を中心に研究を進めることとした。

（２）副主題について

人としてよりよく生きようとする「かつま」っ子を育むための具体的な方策として、「自己の変容を実感できる道徳科の授業やカリキュラムの工夫」を副主題とし、研究を進めていくこととした。「自己の変容を実感できる道徳科の授業」とは、道徳科の授業過程において自分の考え方が広がったり深まったりしたことを感じ取ることができる授業ととらえる。児童自身が心の変容を実感することで、これから先のよりよい生き方を思い描き、実践していこうとする意欲へと繋がることを期待する。道徳科の授業の過程において児童の心の変容を促すためには、資料の主人公の行動や心情の変化を自分の経験と照らし合わせながら考えたり、他者との対話や協働学習をとおして物事を多面的・多角的に考えたりしながら、自己の道徳的価値を深めていくことが大切であると考える。また、心の変容を実感するには授業をとおして深めた道徳的価値をこれからの自己の生き方に生かすことを強く意識させるような振り返りを充実させることが重要であると考える。これらの工夫をとおして「自己の変容を実感できる道徳科の授業」を目指し、研究を深めて行きたい。

「自己の変容を実感できるカリキュラムの工夫」とは、道徳科で深めた道徳的価値を教育活動全体に繋げ、実践をとおして更なる道徳的価値の深まりをねらう取組である。その主軸となるものが「かつま」っ子カードの活用である。「かつま」っ子カードとは、本校の重点内容項目に対して、目指すべき姿を目標として掲げ、道徳科、その他の各教科、行事など様々な場面で自己の目標を立て、実践し、振り返りを行うことで、年間をとおして自己の変容を実感することができるものである。「かつま」っ子カードを活用することで、道徳科で深めた道徳的価値を学校生活の様々な場面で体感し、より良い道徳的行為とは何かを考え、道徳的価値の意義や大切さについて実感を伴った理解をして

いくことを期待する。このような取組をとおして、人としてよりよく生きようとする「かつま」っ子を育んでいきたい。

２　活動内容

（１）第１回校内授業研究会　６月２３日（水）

２年２組　平尾教諭　　資料名「さかあがりできたよ」

指導者　周南市教育委員会　学校教育課　主幹　大丸奈緒美　様

低学年では、研究仮説「発問や話合いのさせ方を工夫することで、道徳的価値の良さに気付き、より良く生きようとする道徳的実践力を高めることができるのではないか。」を設定し、研究を進めた。発問の工夫としては、短い言葉で児童にとって分かりやすい発問をすることが成果として挙げられた。話合いの工夫としては、意思表示カードを活用することで自分の考えと友達の考えを比較しながら聞くことや心情円を活用することで心の変容を視覚化させることが成果として挙げられた。

講師の先生からは、納得と発見のある道徳科の授業にするための手法や主眼や指導案の形式へのアドバイスなどをいただくことができた。

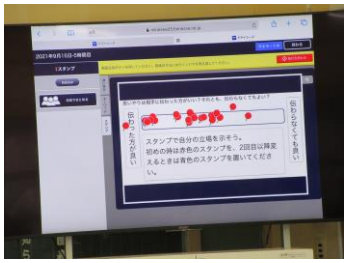
（２）第２回校内授業研究会　９月１５日（水）

４年１組　河野教諭　　資料名「ゆうきの心配」

指導者　光市立光井小学校　校長　温品賢二　様

中学年では、研究仮説「多様な考えをもてるような発問の工夫や、意見の表現方法の工夫をすることで様々な意見にふれ、自己の変容を実感し、道徳的実践力を高めることができるのではないか。」を設定し、研究を進めた。

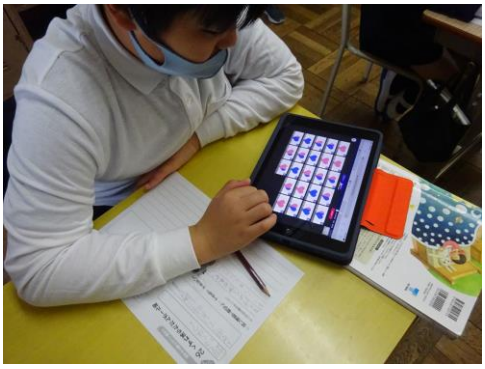
発問の工夫では、２択のシンプルな発問をすることや中心発問後、さらに考えを深めることに繋がるような補助発問の設定が成果として挙げられた。表現方法の工夫としては、タブレットの機能（ムーブノート、スタンプ集計、オクリンク）を活用し、クラス全員の意見を早く、簡単に集約したり共有したりすることに成果があった。児童の考えを見える化するための有効なツールとしてタブレットを活用することできた。



講師の先生からは、道徳科の授業構想を行う上でのプロセスについて学ぶことができた。

（３）第３回校内授業研究会　１１月２４日（水）
５年２組　白石教諭　　資料名「くずれ落ちただんボール箱」
指導者　周南市教育委員会　学校教育課　指導主事　吉永知宏　様

高学年では、研究仮説「児童の本音に迫る発問構成の工夫を行い、学び合いや自己を振り返る活動を充実させることで道徳的価値の自覚や生き方についての考えが深まり、道徳的実践力を高めることができるのではないか。」を設定し、研究を進めた。児童の本音に迫る発問構成の工夫としては、「タイムマシンで同じ場所に戻れたら」や「できる」「できない」の２択で問うことなど児童にとって考えやすく、答えやすい発問を設定することが有効であった。また、中心発問に対する考えを深いものにするための補助発問や追発問についても成果があった。学び合いの成果としては、タブレットの機能を活用し、自分の考えを見える化した上での学び合いが有効であった。第２回校内授業研究会でのICTの活用を参考し、無駄を省き、タブレットに頼るべき場面が吟味された活用であった。



講師の先生からは、道徳授業づくりのポイントを自身の経験に即して話していただき、多くのご示唆をいただくことができた。

３　活動の成果と課題

今年度は学校教育全体の１年間を見通して、道徳科や行事で養うべき重点内容項目を整理することで、より効果的に児童の道徳性を培いつつ、活動と繋げることで、主体的に道徳的行為を行う習慣を身に付けることを目指して研究を進めた。その要となる「かつま」っ子カードについては一定の成果をあげることができた。更に効果を上げるため、工夫・改善を行いつつ継続して取り組んでいきたい。また、道徳的実践意欲を高め、主体的な道徳的行為を促すことをねらいとして取り組んだ「自己の変容を実感できる道徳科の授業」においては、自己の変容を促すような多くの手立てを成果として得ることができた。次年度は、自己の変容を実感させることができるようなより良い振り返りの方法を模索していきたい。